

一

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

朝、六時前に目が覚めた。夢の中で、わたしは、上手に本を読めなくて、「もっと練習しておけばよかった」と焦っていた。

今日は五・六時間目に、四年生が一年生に絵本を読んであげる「読み聞かせ会」がある。この日のために、みんな、一か月前から自分で読む本を決めて練習していた。図書館の「すいせん本」リストや、先生から配られたリストの中から本を選ぶと、自然にグループが出来上がる。そこから更に二、三人でひとつのグループになって、一冊の本を読むパートを決める。でも、わたしは、リストにない本を選んだのでわたし一人。わたしが読みたい本は、『はせがわくんきらいや』（長谷川集平）。もうずっと前から決めていた。

「一人でだいじょうぶ？」

先生から言われて、わたしは「はい、だいじょうぶです」と答えた。正直言って、この本はわたしひとりで読みたかった。だから、ホッとしているし、ちょっと嬉しい。読んでは途中で気持ちをブツツと切って「はい、次の人」と交代するなんて、考えられなかった。

二年生の時、図書館でこの本に出会った。受付で本を借りて帰ろうとしたら、絵本のラックに立ててあった表紙に目が留まった。へろへろの字と、ブツ飛んだ絵。ひっくり返るよ

うな格好の男の子たちと、パンツ丸出しで石蹴りをしている女の子。本を開いてみると、更に強烈。わたしはその場に座りこんで読み始めた。あれ以来、何度も何度も図書館から借りてきた。「そんなに好きなら、買ってあげようか？」とお母さんが言ってくれたけど、絶版になってしまったとかで、どこを探しても売っていない。「読み聞かせ会」で読む本は、絶対にこれだと決めていたけれど、本当は、自分で読むよりも、関西弁の上手な人に読んでほしい。わたしは、それを聞く側に回りたい。テレビで聞く関西弁のイントネーションをまねして練習しても、全然自信がない。お手本がないから、わからない。

すごく不安。でも、あんなに練習したんだから、だいじょうぶ、きつとうまくいく。自分に何度も言い聞かせた。

お掃除の時間に、机と椅子を全部後ろに片付けて、大きな空間を作った。この後、四年生は本を持って、三つの教室に分かれる。がらんと空いた教室のあちこちに四年生の島ができて、一年生は自分の興味のある本のところに行く。一冊の本を読み終えるのに十分ぐらいだから、一年生はいろんな絵本のところに行ける。時間があれば、全部の島を回れるかもしれない。わたしのところには何人ぐらい来てくれるだろうか。時間の計算をしたり、「お客さん」の人数を想像したりしていたら、ますますドキドキしてきた。やっぱ一人は、キツイかも。わたしは、本をひざに立てて、一年生を待った。

このページは白紙です。

前のドアから、男の子が五人ぐらいドドンと入ってきた。窓際のグループに走っていく途中、「はせがわくん」の本をちらつと見て立ち止まった。ボスっぽい男の子。急に気が変わったように、わたしの方を指差して、「こつちにしよう」と言う。すると、他の子もあとについて、いっぺんに男の子五人が移動してきた。

「じゃ、ここに座って」

わたしが言うと、みんな、体育座りをする。後ろから入ってきた女の子四人も、真っ直ぐわたしの前にチョコンと座った。わたしが胸の前で本を立てて見せて、「はせがわくん……」と題名を読み始めると、また後ろから男の子たちが入ってきて、すべり込むように急いで座った。みんなの目が本の表紙に集まっている。わたしはゆつくりと深呼吸をして、一ページ目をめくった。

「この前なんか、ひどかったんや。ぼくら日曜日に……」

声の上がり下がりむずかしい。自分の心臓の音が聞こえる。緊張している。ピアノの発表会よりも、運動会の徒競走よりも。

そう、運動会の徒競走よりも……

急に、さっちゃんが目の中の女の子の顔に重なった。さっちゃんに少し似ている。小さくて細くて、髪の毛がクシャクシャで。でも、この子は、さっちゃんと違って、顔も手も足も汚れてないし、きれいなスカートをはいている。

前の学校のこと、さっちゃんのこと、さっちゃんのお父さんとお母さんのことが、いっぺんに目の前に浮かんできた。一・二年生の時、わたしはさっちゃんと同じクラスだった。わたしは一年生からずっと、学校が終わると学童保育(Ⅱ)子供が放課後に行く保育所)に行っていた。教室の中でおやつを食べて、外で遊んで、また中に入って折り紙で遊んだりしているうち、あつという間に五時になる。

さっちゃんとは別に仲良しでも何でもなかった。背の順に並ぶと、さっちゃんが一番前で、わたしは一番後ろだから、席が隣になることはなかった。家も近くじゃなかったから、いっしょに学校に行くことも、遊ぶこともなかった。さっちゃんとは、帰りの会が終わると、一人で走って帰る。わたしが家に帰る途中、必ずさっちゃんに会った。休みの日に出かける時も、ピアノに行く時も、バレエに行く時も、お母さんと買い物に行く時も、必ず会う。わたしだけじゃなかった。クラスみんながそう言っていた。さっちゃんに①「会う」というよりも、「見かける」というほうが正しいかもしれない。わたしから声をかけることはなかった。さっちゃんは、いつも自転車で猛スピードで目の前を通り過ぎるだけだったから。さっちゃんは、いつも必死で、無我夢中になつて、自転車をこいでいた。今のわたしだったら、「どこ行くの？」ぐらい聞くとと思う。でも、その頃は何も思わなかったし、関心もなかった。さっちゃんの自転車は、子供用の中でも小さい。

なのに、坂道を下りる時はビュンビュン飛ばすし、大きな道路では、トラックや車の間をあつと言う間にジグザグに潜り抜けて行く。

さっちゃんはいつも、口のまわりが汚かった。ケチャップやソースがついていたり、眠っていた時のよだれのあとが白く乾いて残っていた。髪の毛も梳かしてなくて、グチャグチャ。だから、男の子にいつも「きたねー」ってからかわれていた。シャツに食べこぼしがあるのはいつものことだったし、腕や足はカサカサしていた。いつも風邪を引いているみたいに、鼻水が出ているか詰まっているかのどっちかだった。

女の子の中で、さっちゃんと仲良しの子はいなかったと思う。わたしも、仲良くなりたい、とは思わなかった。

ところが、二学期が始まってすぐの日曜日、さっちゃんが突然うちに来た。ピンポン、って、普通は一回だけなのに、何度も何度も鳴らすので、お母さんが急いで玄関を開けた。さっちゃんが一人でドアの外に立っていた。そして、お母さんの後ろにいたわたしを見て、「ハナエちゃん、遊ばない？」とゆつくり言った。

「遊べない。出かけるの、ごめんね」

わたしがはつきり言うと、お母さんは少し驚いたようにわたしの顔を見た。

「いつ遊べる？」

「わかんない」

「何時に帰ってくるの？」

「わかんない。買い物に行くから」

「お昼ごろ？」

「わかんない、って」

「じゃ、お昼過ぎ？」

「……」

なんか、やだ。さっちゃん、いつもこうなんだ。しつこい。

うざい。休みの日は、決まって自転車であちこちの家に「遊ばない？」と言ってまわってるみたいだ。みんな断るそうだから、わたしも断ればいいや、と思っていた。

「ハナエ、じゃ、帰って来たら、さっちゃんに電話すれば？」

お母さんがよいいなことを言う。

「……じゃ、後で電話するね」

しぶしぶわたしが言うと、

「うん、でも、ウチいないかもしれないから、いいよ」

あんまりアッサリ言うので、びつくりした。さっちゃんは「じゃあねー」と言うところと振り向いて、マンションの階段をあつという間に駆け下りていった。

出かける、というのは本当だった。お母さんとチビ(ネコ)のエサと砂を買いに行くだけなんだけど。家に帰る時間は、わからないはずなかった。他に買いものをしてたぶん一時間くらい。でも、さっちゃんと遊ぶのは、めんどくさかったし、②明日、みんながいるところで「ハナエちゃん、きのう楽

「しかったね」とか「また遊ぼうね」なんて言われるかもしれないから、避けることにしたんだ。

断ったけど、すつきりしない。なんか、もやもやしたような、いやな気持ち。

お母さんと自転車で買い物に行く途中、さっちゃんを見かけた。トラックのすぐ後ろを自転車で右に行ったり左に行ったりしていた。必死で自転車をこいでいて、全然わたしに気づかない。急いでいるみたいだった。どこに向かっていているのか、わたしの家と反対方向だった。わたしは、家に帰っても、さっちゃんには電話しなかった。

次の日、さっちゃんはわたしの家に来たことも忘れていた。みたいだった。わたしが「さっちゃん、自転車で急いでどこかに行くところを見かけたんだけど、早くて声かけられなかったよ」と用意しておいた言い訳を言うと、フツウに「うん」と言った。女の子たちは、「さっちゃん、また来たよ」「うちにも」と話している。そして、あんまり目立たない美咲ちゃんが生声で言うのが聞こえてきた。

「うちのママ、さっちゃんに、『お母さんに言ってきたの？』って聞いたら、さっちゃん、『お母さん、寝てる』って言ってたよ。なんかへんだよね」

みんな、それを聞いて、「ねー」と言って笑った。

それから十日後ぐらいに、学校で運動会があった。

わたしは走るのは得意だし、五十メートル走ではゼツタイ

運動靴と細い足が対照的で、歩きにくそう。

お父さんもお母さんも、体の小さい人だった。何か障害があるみたいだった。でも、ふたりとも、真ん中にいるさっちゃんの手をぎゅっと握って、笑いながらさっちゃんの顔を覗き込んでいる。さっちゃんは、黙ってうなずいている。お父さんが、さっちゃんの頭を何度もなでている。

わたしは、ずっと突っ立ったまま見ていた。さっちゃんはわたしに気づかず歩いて行った。

教室で見るさっちゃんとは違う。ひとりで自転車をこいでいるさっちゃんとも違って、両脇をがっちりとお父さんとお母さんに守られていた。さっちゃんよりも、お父さんとお母さんの方が、嬉しそうだった。

③わたしは、三人の後ろ姿をずっと目で追いかけていた。

お母さんが別の入り口から走ってきた。

「ハナエ、こつち側にいたの？」

一瞬、さっちゃんのことを言おうかどうか迷った。でも、言わなかった。さっきの三人の後ろ姿だけ、頭にこびりついている。わたしは母の左手をぎゅっとつかんだ。

今、目の前にいる一年生に、あの時のさっちゃんや友達やわたし自身が重なる。そうだ。わたしがこのくらいの時、この本に出会ったんだ。さっちゃんのマネをして、ひとりで自転車で図書館に行った時、わたしはこの本に出会った。一年生は、わたしのヘタクソな関西弁と、本の絵の迫力と

一番になる、と張り切っていた。結果、ほんとに一等賞になった。徒競走は、応援もすごい。ビデオを持っているお父さんたちがどんどん前に出てくる。大人も大声でかけ声をかけたり笑ったりで、興奮している。

さっちゃんは、練習の時と同じように、ビリだった。というか、最初から競争する感じがなかった。運動靴が大きい。足と運動靴の間にすき間が見えるし、紐もゆるく結んでいる。ちゃんと締めればもっと早く走れるのに。さっちゃんは、自転車に乗っている時の真剣な表情ではなく、最初から諦めたみたいにやる気なさそうにフラフラ走っていた。

最後の整理運動が終わると、自分の椅子を持って、教室に戻る。それから、校庭に出て、皆いっせいに走り出して親を探す。人、人、人でごったがえして、校庭に砂嵐が起ったみたい。真つ白で見えなくなる。

わたしは、道路側の入り口に行つて、しばらくお母さんを待つことにした。あたりを見回していると、二人の大人の人々がニコニコ笑いながら真ん中の子に話しかけながら歩いてくのが見える。歩きにくそうに体をゆすりながら不規則な歩幅で歩いているお母さんと、顔をくしゃくしゃにして笑っているお父さん。そして、真ん中にいるのは、さっちゃん。いつもと同じ。頭がぐしゃぐしゃだ。運動着のお腹のところが砂で汚れている。ゴール前に転んだ時のだ。青い短パンの後ろからは、下着がちよっとだけ飛び出している。大きめの

に、ガラガラ笑っている。ところが、三ページをめくったとたん、一番前の女の子の表情がサツと変わった。めちゃくちゃな絵に矢印で「はせがわくん」と書いてある。短いクレヨンで書いたようなへたくそな字がぎっしり並んでいる。最初のことばは、

「ぼくは、はせがわくんが、きらいです」

目の前の女の子は、本を食い入るようにじっと見ている。気づいたら、シーンと静まりかえり、みんなの視線はわたしを持つている本に集中している。次のページをめくろうとした時、わたしは初めて自分の手に汗をかいていたことに気がついた。

「幼稚園のとき長谷川くんは来たんだよ……」

乳母車に乗っていて、体が弱くて、すぐ泣く長谷川くん。

「頭にきて『泣くな』ゆうてなぐつてやったんだよ」

長谷川くんが殴られて、鼻水と涙を弾き飛ばしのけぞっているスゴイ絵。「ぼく」は、長谷川くんのお母さんから、長谷川くんは小さい時にヒ素の入ったミルクを飲んで体をこわしてしまった、ということ(一九五五年に起こった、乳児用粉ミルクに有害物質のヒ素が混入して多くの被害者が出た事件のこと)を、聞かされる。

「おばちゃんのゆうこと、ようわからへんわ。なんで、そんなミルク飲ませたんや。おばちゃんのゆうこと、わからへん」そう言いながら、ひまわりの花の向こうの縁側で、「おば

ちゃん」からキャンデーをもらって、長谷川くんふたりで食べる。わたしは、本の真ん中をぎゅつと開いて、一年生に、ゆつくりと見せた。そして、少し深呼吸をして、④わたしの大好きな場面に入る準備をした。

「ぼく」は、「はせがわくんきらいや」と言いながらも、長谷川くんを野球に連れて行く。そして、三振ばかりする長谷川くんをイライラする。

長谷川くん もっと早うに走ってみいな。

長谷川くん 泣かんときいな。

長谷川くん わろうてみいな。

長谷川くん もっと太りいな。

長谷川くん ごはんぎょうさん食べようか。

長谷川くん だいじょうぶか。長谷川くん。

一年生の目が本に釘付けになっている。誰も笑わない。

長谷川くんが鉄棒からまっさかさまに落ちると、「ぼく」はバットを投げ出して駆けつける。そして、暗い道を、長谷川くんをおぶって歩く。

「長谷川くんといっしょにおつたら、しんどうてかなわんわ。

長谷川くんなんか きらいや。大だいだいだい だあいきらい」

わたしは、本をゆつくりと閉じた。

女の子の目は、わたしの腕の中の本に釘付けになっている。

最初に座ってくれた男の子たちの、まん丸い目。ぎこちなく

そう」

「絵がおもしろかった」

「はせがわくんはずつとないてた」

「関西弁で、おもしろかった」

「おれは、はせがわくんになりたくない」

「かなしかった。でも、最後はおもしろかった」

「かなしくてもおもしろかった」……

カードを何回も読み返した。

悲しくてもおもしろい、って、ホントだね。

『はせがわくんきらいや』の読み聞かせは、まあまあうまくいったけれど、やっぱり、わたしじゃなくて、誰かに関西弁で読んでほしい。それで、わたしは、聞く側に回ってみよう。

長谷川くんをおぶって歩く男の子の声を聞いてみたい。

「大だいだいだい だあいきらい」と言いながら、暗い道を歩いて行く。ページを、もう一度ゆつくり開いてみる。

★

さっちゃん、今頃、どうしてる？

さっちゃん、一番仲の良い友達って、誰だったんだろう。

あの後、わたしは転校してしまっし、結局、さっちゃんとは一度も遊ばなかった。

ボサボサ頭のさっちゃん。真剣に自転車をこいで、ジグザグに大きな車の間を通り抜けていたさっちゃん。運動会の帰り、お母さんとお父さんに挟まれて歩いていった、さっちゃん

笑ったり周りを見回したりしている顔。泣き出しそうな顔の子もいる。

わたしは、「読み聞かせ」が始まる前は自信がなかったけれど、今、一年生の表情を見ると、ちよつとした「達成感」が喉まで膨らんでくる。

一年生がゆつくりと立ち上がって、次の本のところへ移動する。さっきの男の子のグループのひとりが、わたしに近づいてきて、「おもしろかった」と言い、となりの教室に行った。それだけなのに、わたしはうれしくて、目のあたりがジワーツとしてきた。

六時間目が終わった。一年生は、一番おもしろかったところに感想カードを書いて、本を読んだ四年生に渡す。別に競争じゃないんだけど、わたしたちは、やっぱりカードの枚数が気になる。

思いがけなく、もらったカードの枚数が一番多いのはわたしだった。初めは「一番」というのに浮かれていたけれど、放課後、ひとりでカードをゆつくり読んでみると、⑤別の感動がじわじわとわいてきた。一年生の字は、長谷川くんの字みたいで、ちよつと笑える。

「楽しいんだけど、かなしかった。でも、さいごはおもしろかった」

「はせがわくんは、よわいとおもった」

「はせがわくんは、『きらいや』って何回も言われてかわい

んの後ろ姿。

今頃になって、わたしは、さっちゃんを前よりも鮮明に思い出している。

(華恵『本を読むわたし』による)

問一 この文章の★印より前の部分は、大きく三つの段落に分けることができます。四年生の「わたし」のことが書かれているか、それより前のことが書かれているかに注目して分けたとき、第二段落と第三段落の始まりはどこからになりますか。それぞれ最初の五字を抜き出して答えなさい。テン・マル・カッコなどの記号も一字に数えます。

問二 ①『会う』というよりも、『見かける』というほうが正しいかもしれないとありますが、「会う」と「見かける」という言葉にはどのような意味の違いがありますか。わかりやすく説明しなさい。

問三 ②「明日、みんながいるところで『ハナエちゃん、きのう楽しかったね』とか『また遊ぼうね』なんて言われるかもしれないから、避けることにしたんだ」とありますが、「ハナエ」はそう言われるかもしれないことがなぜ嫌だったのですか。わかりやすく説明しなさい。

問四 — ③「わたしは、三人の後ろ姿をずっと目で追いかけていた」とありますが、なぜですか。わかりやすく説明しなさい。

問五 — ④「わたしの大好きな場面」とありますが、「わたし」はその場面のどのような点に引きつけられていると考えられますか。「ぼく」の言葉と行動に注目して、わかりやすく説明しなさい。

問六 — ⑤「別の感動がじわじわとわいてきた」とありますが、このときの「わたし」の気持ちをわかりやすく説明しなさい。

二 次の文中の——①②③④⑤のカタカナを漢字に直しなさい。
字は一画ずつていねいに書きなさい。

郷里の祖父母を①タズねた。近くのK温泉は山並みが美しく、②ゲイショウの地として有名だ。温泉③ガイに出向き、父と二人で湯を④アびると、長い⑤タビジの疲れもすっかり癒えた。

このページより後ろは白紙です。

解答用紙

氏 名

問一 第二段落

--	--	--	--	--

第三段落

--	--	--	--	--

問
二

--	--

問
三

問
四

[illegible]

問
五

--

問六

--	--

①

1888

②

1000

③

④

⑤

Circumstance	Percentage of respondents (%)
(1) self-defense	95
(2) defense of others	85
(3) defense of property	75
(4) defense of a business	65
(5) defense of a country	15